

目次

0.1	2001 基礎	1
0.2	2001 数学専門	2
0.3	2002 基礎	3
0.4	2002 数学専門	4
0.5	2003 基礎	6
0.6	2003 専門	8

0.1 2001 基礎

$$\boxed{1} (1) \left\{ v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 0 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix} \right\} \text{が基底.}$$

$$(2) f(v_1) = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} = -v_2, f(v_2) = \begin{pmatrix} 0 \\ -1 \\ 1 \end{pmatrix} = v_1 - v_2 \text{である.}$$

$$\text{よって } T = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ -1 & -1 \end{pmatrix} \text{が表現行列.}$$

$$\boxed{2} (1) \begin{pmatrix} 1 & 1 & a^2 \\ 1 & a & 1 \\ 1 & 1 & 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 & 0 & a^2 - 1 \\ 0 & a - 1 & 0 \\ 1 & 1 & 1 \end{pmatrix} \text{より } a \neq \pm 1 \text{ で } \dim V = 3 \text{ } a = -1 \text{ で } \dim V = 2 \text{ } a = 1 \text{ で}$$

$\dim V = 1$ である.

(2) $\varphi: V + W \rightarrow V/(V \cap W); v + w \mapsto [v]$ で定める. $v + w = v' + w'$ なら $w - w' = v' - v \in V \cap W$ であるから $[v] = [v + w - w'] = [v']$ より well-defined である. φ は全射準同型であり, $w \in W \subset \ker \varphi$ は明らか. $\varphi(v + w) = 0$ なら $v \in V \cap W$ より $v + w \in W$ である.

よって $(V + W)/W \cong V/(V \cap W)$ であるから $\dim(V + W) - \dim W = \dim V - \dim(V \cap W)$ である. よって

$$1 = \dim V \cap W = \dim V + \dim W - \dim(V + W) \text{ である. } \begin{vmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & -1 & 3 \\ 1 & -5 & 3 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 0 & -2 & 2 \\ 0 & -6 & 2 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 0 & -2 & 2 \\ 0 & 0 & -4 \end{vmatrix} = 8 \neq 0 \text{ より}$$

$\{v_1, w_1, w_2\}$ は一次独立. よって $\dim V + W = 3$ である. よって $\dim V + \dim W - \dim(V + W) = \dim V - 1 = 1$ より $a = -1$.

$\boxed{3} (1) -2 < a_n < 2$ のとき, $0 < a_{n+1} = \sqrt{a_n + 2} < 2$ である. また $0 < x < 2$ なら $(x - 2)(x + 1) < 0$ より $x^2 < x + 2$. すなわち $x < \sqrt{x + 2}$ である. したがって $-2 < x < 2$ で $x < \sqrt{x + 2}$ が成り立つのは明らか. よって $-2 < a_1 < 2$ のとき $a_1 < a_2 < \dots < 2$ となるから広義単調増加.

$a_1 = 2$ なら $a_2 = 2, \dots, a_n = 2$ より広義単調数列.

$a_n > 2$ なら $a_{n+1} = \sqrt{a_n + 2} > 2$ である. $x > 2$ なら $(x - 2)(x + 1) > 0$ より $x > \sqrt{x + 2}$ である. よって $a_1 > 2$ のとき, $a_1 > a_2 > \dots > 2$ となるから広義単調減少.

(2) 全ての場合において $\{a_n\}$ は有界単調数列であるから収束する. したがってその収束値を α とおけば $\alpha = \sqrt{\alpha + 2}$ であるから $\alpha = 2$ である.

[4] $R_1, R_2 > 1$ とする. $\left| \int_{-R_1}^{R_2} \frac{e^{ix}}{x^2+1} dx \right| \leq \int_{-R_1}^{R_2} \left| \frac{1}{x^2+1} \right| dx \leq \int_{-R_1}^{-1} \frac{1}{x^2} dx + \int_{-1}^1 dx + \int_1^{R_2} \frac{1}{x^2} dx = \left[\frac{-1}{x} \right]_{-R_1}^{-1} + 2 + \left[\frac{-1}{x} \right]_1^{R_2} = 4 - \frac{1}{R_1} - \frac{1}{R_2} \rightarrow 4 \quad (R_1, R_2 \rightarrow \infty)$ である. よって広義積分は収束する.

$R > 10$ とする. \mathbb{C} 上の積分経路 D_R を $C_R = \{Re^{i\theta} \mid \theta \in [0, \pi]\}$ と $[-R, R] \subset \mathbb{R}$ の和集合とし, 反時計回りの向きをとる. $\left| \int_{C_R} \frac{e^{iz}}{z^2+1} dz \right| = \int_0^\pi \left| \frac{\exp(iRe^{i\theta})}{R^2 e^{2i\theta} + 1} Re^{i\theta} i \right| d\theta \leq \int_0^\pi \frac{R \exp(-R \sin \theta)}{R^2 - 1} d\theta \leq \frac{\pi}{R} \rightarrow 0 \quad (R \rightarrow \infty)$ である.

また $\int_{D_R} \frac{e^{iz}}{z^2+1} dz$ は被積分関数の特異点は $\pm i$ であり, 積分領域内では i が唯一の特異点である. 留数をもとめると $\text{Res}\left(\frac{e^{iz}}{z^2+1}, i\right) = \frac{e^{-1}}{2i} = \frac{e^{-1}}{2i}$ である. したがって留数定理から $\int_{D_R} \frac{e^{iz}}{z^2+1} dz = \frac{\pi}{e}$ である.

以上より $\frac{\pi}{e} = \lim_{R \rightarrow \infty} \int_{D_R} \frac{e^{iz}}{z^2+1} dz = \lim_{R \rightarrow \infty} \left(\int_{C_R} \frac{e^{iz}}{z^2+1} dz + \int_{-R}^R \frac{e^{ix}}{x^2+1} dx \right) = \int_{-\infty}^{\infty} \frac{e^{ix}}{x^2+1} dx$ である.

0.2 2001 数学専門

[1] $A \in GL_2(\mathbb{F}_2)$ について $\det A \in \mathbb{F}^\times = 1$ であるから $GL_2(\mathbb{F}_2) = SL_2(\mathbb{F}_2)$ である.

$GL_2(\mathbb{F}_2) = \text{Aut}(\mathbb{F}_2^2)$ である. $\varphi \in \text{Hom}(\mathbb{F}_2^2)$ は基底 $(1, 0), (0, 1)$ で定まる. \mathbb{F}_2^2 の元 v で生成される部分空間 $\text{Span}(v) = \{0, v\}$ であるから, 非零なベクトルは各対ごとに 1 次独立. よって $(0, 0) \neq \varphi(0, 1) \neq \varphi(1, 0) \neq (0, 0)$ なら $\varphi \in \text{Aut}(\mathbb{F}_2^2)$ である. したがって φ は $\mathbb{F}_2^2 \setminus \{0, 0\}$ の置換である. 集合 X の置換群を $\mathfrak{S}(X)$ で表すと, $f: \text{Aut}(\mathbb{F}_2^2) \rightarrow \mathfrak{S}(\mathbb{F}_2^2 \setminus \{0, 0\})$ が定まり, これが全単射準同型であることは明らか. したがって $SL_2(\mathbb{F}_2) \cong \mathfrak{S}_3$ である.

[2] A は $x(x-1)$ を 0 でないべき零元としてもつ.

(a) 中国剰余定理から $\mathbb{R}[x]/(x(x-1)) \cong \mathbb{R}[x]/(x) \times \mathbb{R}[x]/(x-1) \cong \mathbb{R}^2$ より零でないべき零元をもたない. よって同型でない.

(b) $x^2(-x^2+2) + (x-1)^2(x+1)^2 = 1$ であるから $(x^2) + ((x-1)^2) = \mathbb{R}[x]$ である. $\varphi: \mathbb{R}[x]/(x^2(x-1)^2) \rightarrow \mathbb{R}[x]/(x^2) \times \mathbb{R}[x]/((x-1)^2); f + (x^2(x-1)^2) \mapsto (f + (x^2), f + (x-1)^2)$ と定める. φ が well-defined であるのは明らか. $\varphi(f + (x^2(x-1)^2)) = 0$ とすると, $f \in (x^2), f \in (x-1)^2$ である. $f = f \cdot (x^2(-x^2+2) + (x-1)^2(x+1)^2) = (-x^2+2)f \cdot x^2 + (x+1)^2 f \cdot (x-1)^2 \in (x^2(x-1)^2)$ である. よって φ は単射. $g + (x^2), h + (x-1)^2$ に対して $f = g \cdot (x-1)^2(x+1)^2 + h \cdot (-x^2+2)x^2$ とすれば $f + (x^2) = g + (h-g) \cdot (-x^2+2)x^2 + (x^2) = g + (x^2), f + ((x-1)^2) = h + (g-h) \cdot (x-1)^2(x+1)^2 = h + (x-1)^2$ である. よって φ は全射. よって φ は同型写像.

(c) $\mathbb{R}[x]/(x(x-1)) \times \mathbb{R}[x]/(x(x-1)) \cong \mathbb{R}^4$ より零でないべき零元をもたない. よって同型でない.

[4] (1) $\{1, \zeta, \dots, \zeta^5\}$ が基底となる. 一次独立であることは $\sum_{i=0}^5 c_i \zeta^i = 0$ であるについて $c_i \neq 0$ なら ζ の最小多項式が 4 次以下であるとわかる. ζ は 1 の原始 7 乗根であるから $x^7 - 1 = (x-1)(x^6 + x^5 + \dots + 1)$ より $p(x) = x^6 + x^5 + \dots + 1$ が ζ を根にもつ. $p(x+1) = \frac{(x+1)^7 - 1}{x}$ であり 7 は素数であるから $(x+1)^7$ の x^2 から x^6 までの係数は全て 7 の倍数である. よって $p(x+1)$ も最高次の係数は 1 でそれ以外は 7 の倍数であるからアイゼンシュタインの既約判定法から $\mathbb{Z}[x]$ 上既約である. $p(x)$ はモニックであるから $\mathbb{Q}[x]$ 上既約であるため, $p(x)$ も $\mathbb{Q}[x]$ 上既約. よって $p(x)$ が ζ の最小多項式である. $\deg p = 6$ 矛盾. よって一次独立.

$\mathbb{Q}(\zeta)$ は $\mathbb{Q}[\zeta]$ の商体であるが, $\mathbb{Q}[\zeta] \cong \mathbb{Q}[x]/(p(x))$ で $p(x)$ は既約であり, $\mathbb{Q}[x]$ は PID であるから $(p(x))$ は極大イデアル. よって $\mathbb{Q}[\zeta]$ は体であるから $\mathbb{Q}[\zeta] = \mathbb{Q}(\zeta)$ である. $\mathbb{Q}[\zeta]$ の任意の元が $\{1, \zeta, \dots, \zeta^5\}$ で生成されることは明らか. よって基底.

(2) $p(x)$ の根は ζ^i ($i = 1, \dots, 6$) である. よって $p(x)$ は $\mathbb{Q}(\zeta)$ で分解するから Galois 拡大.

$\sigma \in \text{Gal}(\mathbb{Q}(\zeta)/\mathbb{Q})$ を $\sigma(\zeta) = \zeta^3$ とすれば $\sigma^i(\zeta) = \zeta^{3^i}$ であり, $3^i \equiv 1 \pmod{7}$ なる最小の i は 6 であるから σ の位数は 6 である. $|\text{Gal}(\mathbb{Q}(\zeta)/\mathbb{Q})| = [\mathbb{Q}(\zeta) : \mathbb{Q}] = 6$ より $\text{Gal}(\mathbb{Q}(\zeta)/\mathbb{Q}) \cong \mathbb{Z}/6\mathbb{Z}$ である.

(3) $\mathbb{Z}/6\mathbb{Z}$ の真部分群は $3\mathbb{Z}/6\mathbb{Z}, 2\mathbb{Z}/6\mathbb{Z}$ である. 対応する中間体は σ^3 で固定される体と σ^2 で固定される体である. $\sigma^3(\zeta + \zeta^6) = \zeta + \zeta^6 = 2 \cos \frac{2\pi}{7}$ であるから, $\mathbb{Q}(\cos \frac{2\pi}{7})$ である.

$\sigma^2(\zeta + \zeta^2 + \zeta^4) = \zeta^2 + \zeta^4 + \zeta$ であるから $\mathbb{Q}(\zeta + \zeta^2 + \zeta^4)$ である.

よって求める中間体は $\mathbb{Q}, \mathbb{Q}(\zeta + \zeta^2 + \zeta^4), \mathbb{Q}(\zeta + \zeta^6), \mathbb{Q}(\zeta)$ である.

0.3 2002 基礎

[1] A を行基本変形すると, $A = \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 & -2 \\ -1 & 1 & 2 & 3 \\ 2 & 1 & -1 & -3 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & -1 & -2 \\ 0 & 1 & 1 & 1 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ である. (1) $\dim \text{Im}(T) = 2$ で

基底は $\left\{ \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} \right\}$ である.

(2) $\dim \ker(T) = 2$ で基底は $\left\{ \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2 \\ -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \right\}$ である.

[2] A の固有方程式を $g_a(t)$ とすれば $g_a(t) = \begin{vmatrix} 1-t & 0 & 1 \\ 3 & 2-t & 0 \\ a & 0 & 1-t \end{vmatrix} = (2-t) \begin{vmatrix} 1-t & 1 \\ a & 1-t \end{vmatrix} = (2-t)((1-t)^2 -$

$a) = (2-t)(t^2 - 2t - a + 1)$ である.

(1) $a = 4$ より $g_4(t) = (2-t)(t^2 - 2t - 3) = (2-t)(t-3)(t+1)$ である. よって固有値は $2, 3, -1$ であり, それぞれの固有ベクトルは $\begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 3 \\ 2 \end{pmatrix}$ ととれる. よって $P = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 1 \\ 1 & 1 & 3 \\ 0 & 2 & 2 \end{pmatrix}$ とすれば $P^{-1}AP$ は対角行列.

(2) 固有値が全て異なれば対角化可能である. したがって $g_a(t)$ が重解を持つことが必要. $(2-t)(t^2 - 2t - a + 1) = 0$ の解は $t = 2, 1 \pm \sqrt{1 - (1-a)} = 2, 1 \pm \sqrt{a}$ である.

よって重解をもつのは $a = 0, 1$ のときである. $a = 0$ のとき, 固有値 1 の固有空間は $\begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 \\ 3 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} x = 0$ の

解空間であるから次元は 1 である. よって対角化不可能.

$a = 1$ のとき, 固有値 2 の固有空間は $\begin{pmatrix} -1 & 0 & 1 \\ 3 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & -1 \end{pmatrix} x = 0$ の解空間であるから次元は 1 である. よって対

角化不可能.

[3] (1) $f^{(1)}(x) = -\frac{1}{2}(1+x)^{-\frac{3}{2}}, f^{(2)}(x) = (-\frac{1}{2})(-\frac{3}{2})(1+x)^{-\frac{5}{2}}, \dots, f^{(n)}(x) = \frac{(2n-1)!!}{(-2)^n} (1+x)^{-\frac{2n+1}{2}}$ であるから, $f^{(n)}(0) = \frac{(2n-1)!!}{(-2)^n} \quad (n \geq 1)$ である.

よって $1 + \sum_{n=1}^{\infty} \frac{(2n-1)!!}{(-2)^n n!} x^n$ がテイラー展開.

(2) $g'(x) = \frac{1}{1+\sqrt{1+x}} \cdot \frac{\frac{1}{2}(1+x)^{-\frac{1}{2}}}{2} = \frac{1}{2x} (1 - \frac{1}{\sqrt{1+x}})$ である.

よって $g'(x) = -\frac{1}{2x} (\sum_{n=1}^{\infty} \frac{(2n-1)!!}{(-2)^n n!} x^n) = -\sum_{n=1}^{\infty} \frac{(2n-1)!!}{2(-2)^n n!} x^{n-1}$ である. 項別積分すれば $g(x) = -\sum_{n=1}^{\infty} \frac{(2n-1)!!}{n2(-2)^n n!} x^n$ である.

$2^n n! = (2n)!!$ であるから, $g(x) = \sum_{n=1}^{\infty} (-1)^{n-1} \frac{(2n-1)!!}{2n(2n)!!} x^n$ がわかる.

収束半径は $|(-1)^{n-1} \frac{(2n-1)!!}{2n(2n)!!} / (-1)^n \frac{(2n+1)!!}{2(n+1)(2n+2)!!}| = \frac{(n+1)(2n+2)}{n(2n+3)} \rightarrow 1 \quad (n \rightarrow \infty)$ より 1 である.

□4 (1) $x = r \cos \theta, y = r \sin \theta$ と変数変換すると、ヤコビアンは r である。よって

$$\int_0^{2\pi} \int_{\varepsilon}^1 \frac{1}{r^{\lambda}} r dr d\theta = 2\pi \int_{\varepsilon}^1 r^{1-\lambda} dr = \begin{cases} 2\pi \left[\frac{1}{2-\lambda} r^{2-\lambda} \right]_{\varepsilon}^1 & (\lambda \neq 2) \\ 2\pi [\log r]_{\varepsilon}^1 & (\lambda = 2) \end{cases} = \begin{cases} 2\pi \frac{1}{2-\lambda} (1 - \varepsilon^{2-\lambda}) & (\lambda \neq 2) \\ -2\pi \log \varepsilon & (\lambda = 2) \end{cases}$$

である。したがって $2 - \lambda > 0$ なら収束し、値は $\frac{2\pi}{2-\lambda}$ である。

(2) $\lambda \neq 2$ のとき、

$$\begin{aligned} \int_0^{2\pi} \int_{\varepsilon}^1 \frac{\log r}{r^{\lambda}} r dr d\theta &= 2\pi \int_{\varepsilon}^1 r^{1-\lambda} \log r dr = 2\pi \left[\frac{r^{2-\lambda}}{2-\lambda} \log r \right]_{\varepsilon}^1 - 2\pi \int_{\varepsilon}^1 \frac{r^{2-\lambda}}{2-\lambda} \frac{1}{r} dr \\ &= -2\pi \frac{1}{(2-\lambda)^2} (\varepsilon^{2-\lambda} \log \varepsilon^{2-\lambda} + (1 - \varepsilon^{2-\lambda})) = -2\pi \frac{1}{(2-\lambda)^2} \left(1 + \frac{\log \varepsilon^{\lambda-2} - 1}{\varepsilon^{\lambda-2}} \right) \end{aligned}$$

である。

$\frac{\log \varepsilon^{\lambda-2} - 1}{\varepsilon^{\lambda-2}}$ は $\lambda - 2 < 0$ で分母分子共に $\varepsilon \rightarrow 0$ で無限大に発散する。よって $\lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \frac{\varepsilon^{2-\lambda}(\lambda-2)\varepsilon^{\lambda-3}}{(\lambda-2)\varepsilon^{\lambda-3}} = 0$ であるからロピタルの定理より、 $\frac{\log \varepsilon^{\lambda-2} - 1}{\varepsilon^{\lambda-2}} \rightarrow 0$ ($\varepsilon \rightarrow 0$) である。

$\lambda - 2 \geq 0$ なら無限大に発散する。

$\lambda = 2$ のとき、

$$\int_0^{2\pi} \int_{\varepsilon}^1 \frac{\log r}{r^2} r dr d\theta = 2\pi \int_{\varepsilon}^1 \frac{\log r}{r} dr = \left[\frac{1}{2} (\log r)^2 \right]_{\varepsilon}^1 = -\frac{1}{2} (\log \varepsilon)^2 \rightarrow -\infty \quad (\varepsilon \rightarrow 0)$$

より発散する。したがって $\lambda < 2$ で $-2\pi \frac{1}{(2-\lambda)^2}$ に収束する。

0.4 2002 数学専門

□1 (1) F の階数が 1 であるから、 $0 \neq v_1 \in V, f(v) \neq 0$ なる v_1 が存在する。 $\ker F$ は 3 次元部分空間であるから基底 $\{v_2, v_3, v_4\}$ がとれる。 $\sum c_i v_i = 0$ とすると $F(\sum c_i v_i) = c_1 f(v_1) = 0$ より $c_1 = 0$ 。したがって $\{v_2, v_3, v_4\}$ は一次独立であるから $c_i = 0$ ($i = 2, 3, 4$) である。 $S = \{v_1, v_2, v_3, v_4\}$ とすれば一次独立。よって 4 つ元からなる一次独立な集合が得られたから、 V の次元が 4 であることより、 S は基底。

この S に関する表現行列は $F(v_i) = 0$ ($i = 2, 3, 4$) であるから $\begin{pmatrix} \alpha_1 & 0 & 0 & 0 \\ \alpha_2 & 0 & 0 & 0 \\ \alpha_3 & 0 & 0 & 0 \\ \alpha_4 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ となる。

(2) $F(v_1) = \alpha_1 v_1 + \alpha_2 v_2 + \alpha_3 v_3 + \alpha_4 v_4$ としたときに、 $\alpha_1 = 0$ だとする。このとき、 $F^2(v_1) = 0$ であるから、

V の基底を $\{v_1, f(v_1), v'_3, v'_4\}$ ($v'_3, v'_4 \in \ker F$) ととれば表現行列が $\begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ となる。

$\alpha_1 \neq 0$ のとき、 $u_1 = \frac{1}{\alpha_1}(\alpha_1 v_1 + \alpha_2 v_2 + \alpha_3 v_3 + \alpha_4 v_4) \neq 0$ とすれば $F(u_1) = F(v_1) = \alpha_1 u_1$ より u_1 が固有値

α_1 の固有ベクトルとなる。よってジョルダン標準形は $\begin{pmatrix} \alpha_1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ である。

□2 (1) 略。

(2) $\varphi: H \rightarrow K; A = [a_{ij}] \mapsto \text{diag}[a_{11}, a_{22}, a_{33}]$ とすれば φ は全射準同型である。よって $N = \ker \varphi$ とすれば $H/N \cong K$ である。 N は対角成分が全て 1 であるような上三角行列全体である。

[3] (1) \bar{R} において $f \in R$ の剰余類を \bar{f} で表す. $S = \{\bar{1}, \bar{x}, \bar{x}^2\}$ が基底である. $c_0\bar{1} + c_1\bar{x} + c_2\bar{x}^2 = 0$ とすると, $c_0 + c_1x + c_2x^2 \in (x^3 - 2)$ である. よって $c_0 + c_1x + c_2x^2 = (x^3 - 2)f(x)$ なる $f(x) \in R$ が存在する. 次数を比較すれば左辺は 2 以下で右辺は 0 か 3 以上かであるから, $f = 0$. よって $c_0 + c_1x + c_2x^2 = 0$ より $c_0 = c_1 = c_2 = 0$ である. すなわち一次独立.

任意の $f(x) \in R$ は $f(x) = (x^3 - 2)g(x) + c_2x^2 + c_1x + c_0$ ($g(x) \in R, c_i \in K$) と表せる. したがって $\bar{f} = c_2\bar{x}^2 + c_1\bar{x} + c_0$ より \bar{R} を生成する. よって S は基底.

(2) $X^3 - 2$ は素数 2 に着目すれば $\mathbb{Z}[X]$ 上でアイゼンシュタインの既約判定法から既約である. $X^3 - 2$ は原始多項式であるから $\mathbb{Z}[X]$ 上既約であるなら $\mathbb{Q}[X]$ 上既約である. $\mathbb{Q}[X]$ は PID であるから既約元は素元であり, 素イデアル $(X^3 - 2)$ は極大イデアルである. よって \bar{R} は体.

(3) $X^3 - 2 = (X - \sqrt[3]{2})(X^2 + \sqrt[3]{2}X + \sqrt[3]{2}^2)$ である. $(X^2 + \sqrt[3]{2}X + \sqrt[3]{2}^2), (X - \sqrt[3]{2})$ は互いに素なイデアルであるから中国剰余定理より, $\bar{R} \cong \mathbb{R}[X]/(X - \sqrt[3]{2}) \times \mathbb{R}[X]/(X^2 + \sqrt[3]{2}X + \sqrt[3]{2}^2)$ である. $\mathbb{R}[X]/(X - \sqrt[3]{2}) \cong \mathbb{R}$ である.

$X^2 + \sqrt[3]{2}X + \sqrt[3]{2}^2$ は $\mathbb{R}[X]$ 上既約であるから, $\mathbb{R}[X]/(X^2 + \sqrt[3]{2}X + \sqrt[3]{2}^2)$ は \mathbb{R} の代数拡大体となる. \mathbb{C} は代数閉包で \mathbb{C}/\mathbb{R} の拡大次数は 2 であるから, $\mathbb{R}[X]/(X^2 + \sqrt[3]{2}X + \sqrt[3]{2}^2) \cong \mathbb{C}$ である.

よって $\bar{R} \cong \mathbb{R} \times \mathbb{C}$ である.

[4] (1) $x^2 = t$ として $t^2 - t + 1$ の根は $t = \frac{1 \pm \sqrt{1-4}}{2} = \frac{1 \pm \sqrt{-3}}{2}$ である. したがって $x^4 - x^2 + 1$ の根は $\pm \sqrt{\frac{1 \pm \sqrt{-3}}{2}}$ である.

$\sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}} \sqrt{\frac{1-\sqrt{-3}}{2}} = 1$ である. したがって $\mathbb{Q}(\sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}})$ は $\pm \sqrt{\frac{1 \pm \sqrt{-3}}{2}}$ を全て含む. よって $K = \mathbb{Q}(\sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}})$ であり, $[K : \mathbb{Q}] = 4$ である. また基底は $\{1, \sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}}, \frac{1+\sqrt{-3}}{2}, \frac{1+\sqrt{-3}}{2} \sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}}\}$ である. これは次のようにしてわかる. 一次従属なら $\sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}}$ の最小多項式を 3 次以下でとれる. $P(X) = X^4 - X^2 + 1$ とすれば $P(X)$ が $\mathbb{Z}[x]$ 上可約であると分かる.

$q(X) \mid P(X)$ なら $q(-X) \mid P(X)$ である.

(i) $q(X) = q(-X)$ のとき, $q(X) = X^2 - a$ とかける. よって $P(X) = (X^2 - a)(X^2 - b)$ である. 係数比較をすれば $a + b = 1$, $ab = 1$ であるから, $(x - a)(x - b) = x^2 - x + 1$ である. しかし $x^2 - x + 1$ は $\mathbb{Z}[x]$ 上既約であるから矛盾.

(ii) $q(X) \neq q(-X)$ のとき, $q(X) = X^2 - aX + b$ とかける. $P(X) = (X^2 - aX + b)(X^2 + aX + b)$ である. 係数比較をすれば $b^2 = 1$, $a^2 + 2b = 0$ である. よって $b = \pm 1$ である. $b = 1$ なら $a^2 + 2 = 0$ であるから, 矛盾. $b = -1$ なら $a^2 - 2 = 0$ であるから, $a^2 = 2$ であるがこれは $a \in \mathbb{Q}$ より矛盾.

以上より $P(X)$ は $\mathbb{Z}[X]$ 上既約である. よって $\mathbb{Q}[X]$ 上既約であるから, これは一次従属でないことを意味する. よって一次独立であるから基底であるとわかる.

(2) $\sigma \in \text{Gal}(K/\mathbb{Q})$ について $\sigma(\sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}}) = \sqrt{\frac{1-\sqrt{-3}}{2}}$ とする. このとき $\sigma^2(\sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}}) = \sigma(\sqrt{\frac{1-\sqrt{-3}}{2}}) = \sigma(1/\sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}}) = \frac{1}{\sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}}} = \sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}}$ である. よって $\sigma^2 = \text{id}$ である. また $\tau \in \text{Gal}(K/\mathbb{Q})$ について

$\tau(\sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}}) = -\sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}}$ とする. このとき $\tau^2 = \text{id}$ である. $\text{Gal}(K/\mathbb{Q})$ 位数 4 の群であるから, $(\mathbb{Z}/2\mathbb{Z})^2, \mathbb{Z}/4\mathbb{Z}$ のいずれかである. 位数 2 の元を 2 つ以上含むことから $\text{Gal}(K/\mathbb{Q}) \cong (\mathbb{Z}/2\mathbb{Z})^2$ である. また σ, τ によって生成されると分かる. (3) $\text{Gal}(K/\mathbb{Q})$ の非自明な部分群は $\langle \sigma \rangle, \langle \tau \rangle, \langle \sigma \circ \tau \rangle$ である.

σ で不変な元 $\sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}} + \sqrt{\frac{1-\sqrt{-3}}{2}} = \alpha$ とすれば $\alpha^2 = 3$ であるから, α は $\pm\sqrt{3}$ のいずれかである. τ で不変な元 $\sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}}(-\sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}}) = -\frac{1+\sqrt{-3}}{2}$ である.

$\sigma \circ \tau$ で不変な元 $\sqrt{\frac{1+\sqrt{-3}}{2}} - \sqrt{\frac{1-\sqrt{-3}}{2}} = \beta$ とすれば $\beta^2 = -1$ であるから, β は $\pm i$ のいずれかである.

以上より非自明な中間体は $\mathbb{Q}(\sqrt{3}), \mathbb{Q}(\sqrt{-1}), \mathbb{Q}(\sqrt{-3})$ である. これに K, \mathbb{Q} を加えれば全ての中間体が得られる.

0.5 2003 基礎

[1] (1) V の元の和が V の元に属するためには $a = b = c = d = 0$ が必要十分である. V は $A = \begin{pmatrix} 1 & 1 & p+1 & 3 & q \\ 1 & 2 & 2p+1 & 2 & 0 \\ 1 & 0 & -p & 4 & 4q \\ 0 & 1 & -p^2 & -1 & -2q \end{pmatrix}$ の解空間である. A を簡約化すると,

$$A \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 1 & p+1 & 3 & q \\ 0 & 1 & p & -1 & -q \\ 0 & -1 & -2p-1 & 1 & 3q \\ 0 & 1 & -p^2 & -1 & -2q \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & 1 & 4 & 2q \\ 0 & 1 & p & -1 & -q \\ 0 & 0 & -p-1 & 0 & 2q \\ 0 & 0 & -p^2-p & 0 & -q \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & 1 & 4 & 2q \\ 0 & 1 & p & -1 & -q \\ 0 & 0 & -p-1 & 0 & 2q \\ 0 & 0 & 0 & 0 & -q-2pq \end{pmatrix}$$

である. これの解空間の次元が 3 になるためには $-p-1=0, 2q=0, -q-2pq=0$ が必要十分. したがって $p=-1, q=0$ である.

(2) $p=-1, q=0$ を代入して $\begin{pmatrix} 1 & 0 & 1 & 4 & -2 \\ 0 & 1 & -1 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ の解空間が V である. よって基底は

$$\left\{ \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} -4 \\ 1 \\ 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \right\} \text{ である.}$$

[2] (1) ω を 1 の原始三乗根として, $\begin{pmatrix} 1 & a & a \\ a & 1 & a \\ a & a & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} = (1+2a) \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 & a & a \\ a & 1 & a \\ a & a & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ \omega \\ \omega^2 \end{pmatrix} = (1+a\omega+a\omega^2) \begin{pmatrix} 1 \\ \omega \\ \omega^2 \end{pmatrix}$ である. $1+a\omega+a\omega^2=1+a\omega+a(-1-\omega)=1-a$ である. したがって固有値は $1+2a, 1-a$ である.

(2) 固有値が $1-a$ の固有ベクトルとして $\begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}$ がとれる. 直交化すると, $\begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}$ である.

正規化することで $T = \begin{pmatrix} \frac{1}{\sqrt{3}} & \frac{1}{\sqrt{3}} & \frac{1}{\sqrt{3}} \\ \frac{1}{\sqrt{2}} & \frac{-1}{\sqrt{2}} & 0 \\ \frac{1}{\sqrt{6}} & \frac{1}{\sqrt{6}} & \frac{2}{\sqrt{6}} \end{pmatrix}$ は直交行列. このとき, $D = T^{-1}AT = \begin{pmatrix} 1+2a & 0 & 0 \\ 0 & 1-a & 0 \\ 0 & 0 & 1-a \end{pmatrix}$ となる.

(3) $B = \{(x, y, z) \in \mathbb{R}^3 \mid x^2 + y^2 + z^2 = 1\}$ とする. T は直交行列であるから

$$\begin{aligned} \left[\forall (x, y, z) \in B, \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}^t A \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \geq -1 \right] &\Leftrightarrow \left[\forall (x, y, z) \in B, \begin{pmatrix} T \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \end{pmatrix}^t AT \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \geq -1 \right] \\ &\Leftrightarrow \left[\forall (x, y, z) \in B, \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}^t T^{-1}AT \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \geq -1 \right] \Leftrightarrow \left[\forall (x, y, z) \in B, \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}^t D \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \geq -1 \right] \end{aligned}$$

である. $(x, y, z)D \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = (1+2a)x^2 + (1-a)y^2 + (1-a)z^2 = (1-a)(x^2 + y^2 + z^2) + 3ax^2 = 3ax^2 + 1 - a \geq -1$

であるから, $x \in [-1, 1]$ で $3ax^2 + 2 - a \geq 0$ が成り立つ a をもとめる. $a > 0$ のとき, 左辺は $x = 0$ で最小値 $2 - a$ をとるから $2 - a \geq 0$ より $0 < a \leq 2$ である.

$a = 0$ なら明らかに成立する.

$a < 0$ なら左辺は $x = \pm 1$ で最小値をとるから $3a + 2 - a \geq 0$ より $0 > a \geq -1$ である. よって $-1 \leq a \leq 2$ が必要十分条件.

$(x, y, z)A \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \geq -1 \Leftrightarrow (x, y, z)A \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} + (x, y, z)E \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \geq 0 \Leftrightarrow (x, y, z)(A + E) \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \geq 0$ これが任意の $(x, y, z) \in B$ について成り立つことは任意の $\mathbb{R}^3 \setminus \{O\}$ で成り立つことと同値である. (正規化すればよい.)

すなわち $A + E$ が半正定値であることと必要十分. これは $A + E$ 全ての固有値が非負であることと必要十分であり, $A + E$ の固有値は $2 + 2a, 2 + a\omega^2 + a\omega = 2 - a$ である. よって $2 + 2a \geq 0, 2 - a \geq 0$ より $2 \geq a \geq -1$ である.

[3] (1) 分母分子の極限が ∞ であるからロピタルの定理を使う. $\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{\frac{1}{e^{ax} + e^x}(ae^{ax} + e^x)}{1} = \lim_{x \rightarrow \infty} \frac{1}{e^{ax} + e^x}(ae^{ax} + e^x) = \lim_{x \rightarrow \infty} \frac{1}{e^{ax} + e^x}(a(e^{ax} + e^x) - (a-1)e^x) = \lim_{x \rightarrow \infty} a - \frac{1}{e^{(a-1)x} + 1}(a-1)$ である. $a - 1 \geq 0$ なら極限は a である. $a - 1 < 0$ のとき, 極限は 1 である. よって $\lim_{x \rightarrow \infty} \frac{1}{x} \log(e^{ax} + e^x) = \max(a, 1)$ である.

(2) $t + x = u$ と変数変換すれば $h(x) = \int_x^{2x} e^{e^u} du$ である. よって $h'(x) = 2e^{e^{2x}} - e^{e^x}$ である.

(3) $\frac{\partial g}{\partial r} = \frac{\partial f}{\partial x} \cos \theta + \frac{\partial f}{\partial y} \sin \theta, \frac{\partial g}{\partial \theta} = \frac{\partial f}{\partial x}(-r \sin \theta) + \frac{\partial f}{\partial \theta}(r \cos \theta)$ である. よって $\frac{\partial f}{\partial x} = \frac{\partial g}{\partial r}(\cos \theta) + \frac{\partial g}{\partial \theta}(\frac{-\sin \theta}{r}), \frac{\partial f}{\partial y} = \frac{\partial g}{\partial r}(\sin \theta) + \frac{\partial g}{\partial \theta}(\frac{\cos \theta}{r})$ である. また $r = \sqrt{x^2 + y^2}$ より $\frac{\partial r}{\partial x} = \frac{x}{r} = \cos \theta$ である. $\tan \theta = \frac{y}{x}$ より x で偏微分して $\frac{1}{\cos^2 \theta} \frac{\partial \theta}{\partial x} = -\frac{y}{x^2}$ より $\frac{\partial \theta}{\partial x} = -\frac{r \sin \theta}{r^2 \cos^2 \theta} \cos^2 \theta = -\frac{\sin \theta}{r}$ である.

$$\begin{aligned} \frac{\partial}{\partial x} \frac{\partial g}{\partial r} &= \frac{\partial^2 g}{\partial r^2} \cos \theta + \frac{\partial^2 g}{\partial \theta \partial r} \frac{-\sin \theta}{r}, \frac{\partial}{\partial x} \frac{\partial g}{\partial \theta} = \frac{\partial^2 g}{\partial r \partial \theta} \cos \theta + \frac{\partial^2 g}{\partial \theta^2} \frac{-\sin \theta}{r} \\ \frac{\partial^2 f}{\partial x \partial y} &= \frac{\partial}{\partial x} \frac{\partial g}{\partial r}(\sin \theta) + \frac{\partial g}{\partial r}(\cos \theta \frac{-\sin \theta}{r}) + \frac{\partial}{\partial x} \frac{\partial g}{\partial \theta}(\frac{\cos \theta}{r}) + \frac{\partial g}{\partial \theta}(\frac{-\sin \theta}{r} \frac{\cos \theta}{r} - \frac{\cos \theta}{r^2} \cos \theta) \\ &= \left(\frac{\partial^2 g}{\partial r^2} \sin \theta \cos \theta - \frac{\partial^2 g}{\partial \theta \partial r} \frac{\sin^2 \theta}{r} \theta \right) - \frac{\partial g}{\partial r}(\frac{\cos \theta \sin \theta}{r}) + \left(\frac{\partial^2 g}{\partial r \partial \theta} \frac{\cos^2 \theta}{r} + \frac{\partial^2 g}{\partial \theta^2} \frac{-\sin \theta \cos \theta}{r^2} \right) + \frac{\partial g}{\partial \theta}(\frac{\sin^2 \theta - \cos^2 \theta}{r^2}) \\ &= \frac{\partial^2 g}{\partial r^2} \sin \theta \cos \theta + \frac{1}{r} \frac{\partial^2 g}{\partial r \partial \theta}(\cos^2 \theta - \sin^2 \theta) + \frac{\partial^2 g}{\partial \theta^2} \frac{-\sin \theta \cos \theta}{r^2} + \frac{\partial g}{\partial \theta}(\frac{\sin^2 \theta - \cos^2 \theta}{r^2}) - \frac{\partial g}{\partial r}(\frac{\cos \theta \sin \theta}{r}) \end{aligned}$$

$$(4) \iint_D xy dx dy = \int_0^1 \int_{x^2}^x xy dy dx = \int_0^1 x [\frac{1}{2}y^2]_{x^2}^x dx = \frac{1}{2} \int_0^1 x^3 - x^5 dx = \frac{1}{2} [\frac{1}{4}x^4 - \frac{1}{6}x^6]_0^1 = \frac{1}{24}$$

[4] (1) $\arcsin(\sin x) = x$ を x で微分すると, $(\arcsin)'(\sin x) \cos x = 1$ より $\arcsin'(x) = \frac{1}{\cos \arcsin x}$ であ

る. $\cos^2(\arcsin x) + \sin^2(\arcsin x) = 1$ より $\cos^2(\arcsin x) = 1 - x^2$ である. $-\frac{\pi}{2} < x < \frac{\pi}{2}$ であるから $\cos(\arcsin x) > 0$ である. よって $\cos(\arcsin x) = \sqrt{1-x^2}$ である.

よって $g'(x) = \frac{1}{\sqrt{1-x^2}}$ である. $g''(x) = \frac{x}{(1-x^2)^{\frac{3}{2}}}$ である.

(2) $f'(x) = g(x)g'(x)$ である. よって $\sqrt{1-x^2}f'(x) = \arcsin x$ である. x で微分すれば $-\frac{x}{(\sqrt{1-x^2})}f' + \sqrt{1-x^2}f'' = \frac{1}{\sqrt{1-x^2}}$ である. したがって $-xf'' + (1-x^2)f'' = 1$ である.

(3) $f'(x) = \sum_{n=1}^{\infty} na_n x^{n-1}$, $f''(x) = \sum_{n=2}^{\infty} n(n-1)a_n x^{n-2}$ である. よって $(1-x^2)f''(x) - xf'(x) = \sum_{n=2}^{\infty} (n(n-1)a_n x^{n-2} - n(n-1)a_n x^n) - \sum_{n=1}^{\infty} na_n x^n = \sum_{n=2}^{\infty} (n+2)(n+1)a_{n+2}x^n - \sum_{n=2}^{\infty} n(n-1)a_n x^n - \sum_{n=1}^{\infty} na_n x^n = 1$ である.

よって n の係数を比較すれば $2a_2 = 1, 3 \cdot 2a_3 - a_1 = 0, (n+2)(n+1)a_{n+2} - n(n-1)a_n - na_n = 0$ ($n \geq 2$) である. よって $(n+2)(n+1)a_{n+2} = n^2 a_n$ ($n \geq 2$) である. この等式に $n=1$ を代入すると, $3 \cdot 2a_3 = a_1$ となりこれは成り立つ. よって $(n+2)(n+1)a_{n+2} = n^2 a_n$ ($n \geq 1$) である. また $a_0 = f(0) = \frac{1}{2}g(0)^2 = 0, a_1 = f'(0) = g(0)g'(0) = 0, a_2 = \frac{1}{2}$ である.

(4) $3 \cdot 2a_3 = 1a_1 = 0$ より $a_3 = 0$ である. $4 \cdot 3a_4 = 4a_2 = 2$ より $a_4 = \frac{1}{6}$ である. $5 \cdot 4a_5 = 9a_3 = 0$ より $a_5 = 0$ である. $6 \cdot 5a_6 = 16a_4$ より $a_6 = \frac{4}{45}$ である.

よって $\lim_{x \rightarrow 0} \frac{f(x) - (\frac{1}{2}x^2 + \frac{1}{6}x^4)}{x^6} = \lim_{x \rightarrow 0} \frac{\frac{4}{45}x^6 + O(x^7)}{x^6} = \frac{4}{45}$ である.

0.6 2003 専門

[1] (1) V は 3 次元線形空間であるから $\{v_1, v_2, v_3\}$ が一次独立であることを示せばよい. $c_1 v_1 + c_2 v_2 + c_3 v_3 = 0$ とする. $F(c_1 v_1 + c_2 v_2 + c_3 v_3) = c_1 f(v_1) = 0$ であり, $F(v_1) \neq 0$ より $c_1 = 0$ である. よって $c_2 v_2 + c_3 v_3 = 0$ であるが v_2, v_3 は一次独立であるから $c_2 = c_3 = 0$ である. したがって $\{v_1, v_2, v_3\}$ は基底.

(2) $\{v_1, v_2, v_3\}$ が基底であるから $F(v_1) = av_1 + bv_2 + cv_3$ なる $a, b, c \in V$ が存在する. したがって表現行列は $\begin{pmatrix} a & 0 & 0 \\ b & 0 & 0 \\ c & 0 & 0 \end{pmatrix}$ である.

(3) $F(v_1) \notin U$ であるから $a \neq 0$ である. $u_1 = v_1 + \frac{b}{a}v_2 + \frac{c}{a}v_3$ とする. $F(u_1) = F(v_1) = a(v_1 + \frac{b}{a}v_2 + \frac{c}{a}v_3) = au_1$ である. $\{u_1, v_2, v_3\}$ に関する表現行列は対角行列である.

(4) U の一次独立な集合 $\{F(v_1)\}$ を延長して U の基底 $\{F(v_1), v_3\}$ をとる. このとき $\{v_1, F(v_1), v_3\}$ に関する表現行列は $\begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$ であり, ジョルダン標準形である.

[2] (1) U が開集合 $\Leftrightarrow \forall x \in U, \exists r > 0, B_r(x) \subset U$ である.

(2) ((a) \Rightarrow (b)) U を \mathbb{R}^N の開集合とする. $x \in f^{-1}(U)$ を任意にとる. $f(x) \in U$ より $\exists r > 0, B_r(f(x)) \subset U$ である. したがって $f^{-1}(B_r(f(x))) \subset f^{-1}(U)$ がなりたつ. いま (a) より r に対してある $\delta > 0$ が存在して $B_\delta(x) = f^{-1}f(B_\delta(x)) \subset f^{-1}(B_r(f(x))) \subset f^{-1}(U)$ である. よって $f^{-1}(U)$ は開集合である.

((b) \Rightarrow (a)) 任意の $a \in \mathbb{R}^N, \varepsilon > 0$ をとる. $B_\varepsilon(f(a))$ は開集合であるから $a \in f^{-1}(B_\varepsilon(f(a)))$ も開集合である. したがってある $\delta > 0$ が存在して $B_\delta(a) \subset f^{-1}(B_\varepsilon(f(a)))$ である. f で送って $f(B_\delta(a)) \subset f(f^{-1}(B_\varepsilon(f(a)))) \subset B_\varepsilon(f(a))$ である.

(3) ((a) \Rightarrow (c)) 任意の $\varepsilon > 0$ に対してある $\delta > 0$ が存在して $f(B_\delta(a)) \subset B_\varepsilon(f(a))$ である. したがってある N が存在して $n > N$ なら $d(a_n, a) < \delta$ すなわち $a_n \in B_\delta(a)$ が成り立つ. よって $f(a_n) \in B_\varepsilon(f(a))$ であるから $d(f(a_n), f(a)) < \varepsilon$ である. これは $\lim f(a_n) = f(a)$ を意味する.

((c) \Rightarrow (a)) 背理法を用いる. ある $a \in \mathbb{R}^N$ と $\varepsilon > 0$ が存在して任意の $\delta > 0$ に対して $f(B_\delta(a)) \not\subset B_\varepsilon(f(a))$ であると仮定する. このとき $\delta = \frac{1}{n}$ とすれば $a_n \in B_\delta(a)$ で $f(a_n) \notin B_\varepsilon(f(a))$ なるものがとれる. これによって

数列 $\{a_n\}$ を作れば $\{a_n\}$ は a に収束するが $\{f(a_n)\}$ は $f(a)$ に収束しない。これは矛盾。

[3] (1) $x = r \cos \theta, y = r \sin \theta$ とおくとヤコビアンは r である。よって $I_n = \int_0^{2\pi} \int_0^\infty \frac{r^2}{1+r^{2n}} dr d\theta$ である。

(2) I_n の収束性は $\int_0^\infty \frac{r^2}{1+r^{2n}} dr$ の収束性と同値。 $[0, 1]$ では被積分関数が有界であるから $\int_1^\infty \frac{r^2}{1+r^{2n}} dr$ の収束性と同値。 $n \geq 2$ のとき、 $\int_1^M \frac{r^2}{1+r^{2n}} dr \leq \int_1^M r^{2-2n} dr = \left[\frac{1}{3-2n} r^{3-2n} \right]_1^M = \frac{1}{3-2n} (M^{3-2n} - 1) \rightarrow \frac{1}{3n-2} \quad (M \rightarrow \infty)$ である。 $n = 1$ のとき、 $r \geq 1$ より $r^2 \geq 1$ であるから $2r^2 \geq r^2 + 1$ である。よって $\int_1^M \frac{r^2}{1+r^2} dr \geq \int_1^M \frac{r^2}{2r^2} dr = \int_1^M \frac{1}{2} dr = \frac{1}{2} M \rightarrow \infty \quad (M \rightarrow \infty)$ より発散する。

よって求める最小値 a は $a = 2$ である。

(3) $\frac{z^k}{1+z^4}$ は $z = e^{\frac{\pi i}{4}}, e^{\frac{3\pi i}{4}}, e^{\frac{5\pi i}{4}}, e^{\frac{7\pi i}{4}}$ をそれぞれ 1 位の極として持つ。積分路 Γ 内の特異点は $z = e^{\frac{\pi i}{4}}, e^{\frac{3\pi i}{4}}$ である。留数は $\text{Res}\left(\frac{z^k}{1+z^4}, e^{\frac{\pi i}{4}}\right) = \left(\frac{z^k}{4z^3}\right)\Big|_{z=e^{\frac{\pi i}{4}}} = \frac{1}{4} e^{\frac{(k-3)\pi i}{4}}, \text{Res}\left(\frac{z^k}{1+z^4}, e^{\frac{3\pi i}{4}}\right) = \left(\frac{z^k}{4z^3}\right)\Big|_{z=e^{\frac{3\pi i}{4}}} = \frac{1}{4} e^{\frac{(3k-1)\pi i}{4}}$ である。したがって留数定理から $\int_\Gamma \frac{z^k}{1+z^4} dz = 2\pi i \left(\frac{1}{4} e^{\frac{(k-3)\pi i}{4}} + \frac{1}{4} e^{\frac{(3k-1)\pi i}{4}}\right)$ である。

(4)

$$\left| \int_{C_R} \frac{z^2}{1+z^4} dz \right| = \left| \int_0^\pi \frac{R^2 e^{2i\theta}}{1+R^4 e^{4i\theta}} R i e^{i\theta} d\theta \right| \leq \int_0^\pi \left| \frac{R^3}{1+R^4 e^{4i\theta}} \right| d\theta \leq \int_0^\pi \left| \frac{R^3}{R^4-1} \right| d\theta = \pi \frac{R^3}{R^4-1} \rightarrow 0 \quad (R \rightarrow \infty)$$

$$\int_{[-R, R]} \frac{z^2}{1+z^4} dz = \int_{[-R, 0]} \frac{z^2}{1+z^4} dz + \int_{[0, R]} \frac{z^2}{1+z^4} dz = \int_R^0 \frac{r^2}{1+r^4} (-1) dr + \int_0^R \frac{r^2}{1+r^4} dr = 2 \int_0^R \frac{r^2}{1+r^4} dr$$

である。よって $\int_\Gamma \frac{z^2}{1+z^4} dz = \int_{C_R} \frac{z^2}{1+z^4} dz + 2 \int_0^R \frac{r^2}{1+r^4} dr$ である。 $R \rightarrow \infty$ として $2\pi i \left(\frac{1}{4} e^{\frac{(2-3)\pi i}{4}} + \frac{1}{4} e^{\frac{(3 \cdot 2 - 1)\pi i}{4}}\right) = 0 + 2 \int_0^\infty \frac{r^2}{1+r^4} dr$ である。したがって $\int_0^\infty \frac{r^2}{1+r^4} dr = \frac{\sqrt{2}}{4} \pi$ である。よって $I_2 = \int_0^{2\pi} \frac{\sqrt{2}}{4} \pi d\theta = \frac{\pi^2}{\sqrt{2}}$ である。

[4] (1) $\varphi: K[X, Y] \rightarrow K[t]; x \mapsto t^3, y \mapsto t^2$ とする。このとき $\ker \varphi \supset (X^2 - Y^3)$ は明らか。 $f(X, Y) \in \ker \varphi$ とすると、 $f(X, Y) = (X^2 - Y^3)g(X, Y) + Xh_1(Y) + h_2(Y)$ とできる。 φ でおくれば $0 = t^3 h_1(t^2) + h_2(t^2)$ である。 t の次数について、偶数の次数を比較すれば $0 = h_2(t^2)$ であるから $h_2 = 0$ である。よって $0 = t^3 h_1(t^2)$ より $h_1 = 0$ である。すなわち $\ker \varphi = (X^2 - Y^3)$ である。

よって準同型定理から $R = K[X, Y] / \ker \varphi \cong \text{Im } \varphi = K[t^3, t^2]$ である。

$K[t^3, t^2]$ は $K[t]$ の部分環であるから整域であることは明らか。よって R は整域。

(2) $K[t^2, t^3]$ の商体は $t^3/t^2 = t$ より $K(t)$ である。 $K[t^2, t^3][s] \ni s^2 - t^2$ は t を根にもつモニック多項式であるが、 $t \notin K[t^2, t^3]$ であるから R は整閉でない。